

ICT 導入による授業改善

－ 実践的リーダーの立場から －

学籍番号 J219109

氏名 阪口 亮

主指導教員 田村 知子

副指導教員 佐々木 靖

第1章 問題の所在と目的

本実践研究は2021年度と2022年度では異なる学校で行ったものである。2021年度はK高等学校、2022年度はH高等学校で実践を行った。

社会的な問題の背景として、「急速な少子高齢化による日々変化し続ける社会」や「Society5.0」がある。子ども達がそのような社会に対応していく力を身に付けるためには、授業での ICT の導入が必須である。しかし、PISA 調査における授業内での ICT の活用は「利用しない」という解答が多いことが現状である。高等学校においては ICT の整備段階でさえ課題を抱えており、授業での活用には程遠い状況である。一方、授業内で「使うこと」を目的とした場合には、生徒たちの基礎的な学力が下がる可能性を指摘した。そこで、2 つの実践校での研究目的を下記のように設定した。

K 高等学校での目的は、実践的リーダーの立場から ICT を活用した「生徒同士が繋がる授業」の提案とその授業の普及と学校全体で生徒の学びを深めさせることである。

H 高等学校での目的は、実践的リーダーの立場の獲得と Chromebook の導入・活用を定着させることである。そして、ICT を活用した「生徒同士が繋がる授業」の提案とその授業の普及。そして、学校全体で生徒の学びを深めていくこと。

第2章 課題解決に関する先行実践と先行研究

K 高等学校・H 高等学校の課題解決に向けて、ICT 導入を迅速に進めた熊本市の『熊本市版 ICT 教育モデルカリキュラム中学校版 Ver1.0』（2022）を紐解き、その要点を4つに整理した。①授業の目的を明確化しておくことの重要性、②情報活用能力の育成のために児童生徒に日常的に活用させることの重要性、③教員自ら ICT を活用した児童生徒の学習プロセスを体験することの重要性、④教員全員で ICT の活用方法、授業について考えることの重要性、である。そして、上記4点の重要性を意識し、組織に普及させていくための必要となるのが、カリキュラムリーダーの中心となる「実践的リーダー」（木原ほか2009）であることが明らかとなった。

第3章 実践 I K 高等学校における取組み

K 高等学校においては、報告者は第3学年の学年主任であり、CC 委員会(Chromebook・Classroom 委員会)において学校全体に自信の取り組みを発信できる立場にあった。そのため、自身が「実践的リーダー」の立場であることを自覚して実践を行った。ICT 導入までに一斉授業から脱却し、生徒が主体となる「生徒同士が繋がる授業」の実践を行った。ICT 導入後も引き続き授業実践を重ねた。授業アンケートでは ICT 導入以前の方が高い結果となった

が、報告者自身と生徒の ICT スキルの問題であると推察した。ICT の導入を進めていくにあたり、教員 7 名に対して授業観察にて S-T 分析を行い授業の型を分類した。その結果、K 高等学校では一斉授業が見受けられなかった。そのため、「生徒同士の繋がる授業」に向けての ICT 導入がスムーズに行われていく可能性を見出した。しかし、生徒が考えを発表する時間が極めて少ないことも明らかとなった。

CC 委員会では Chromebook の導入に向けて校内研修を 3 回行った。その結果、教員全員が Chromebook の活用方法を習得することができた。また、自身の Chromebook を活用した授業実践も発信することができた。そこで、教員全体で授業についての話をする機会が増えていった。その結果、学校の授業アンケートの平均値を上昇させることに成功した。一方で S-T 分析の結果から「生徒同士が繋がる授業」の普及には程遠い状況であることも理解した。

第 4 章 実践Ⅱ H 高等学校における取り組み

H 高等学校では転勤 1 年目であり、第 1 学年の副担任となった。そして、委員会所属も少なくなったため、まずは実践的リーダーとしての立場を獲得する必要性があった。所属学年において、自身が所属する分掌や他分掌の業務を懸命に行っていくことで、学年内における実践的リーダーの立場を獲得することができた。しかし、「実践的リーダー」としての立場を獲得するまでには時間を要した。K 高等学校に引き続き、Chromebook 導入後の「生徒同士が繋がる授業」に向けての自身の授業実践を重ねた。生徒たちは一斉授業の形態になれており、協働的な活動が行われる授業には苦戦している姿が見られた。しかし、繰り返していくうちに、生徒同士の対話が増え、協働的な学習を行えるようになっていった。その結果、報告者の授業アンケート平均値は学校平均値を大きく上回ることができた。

授業改善の可能性を探るために、教員 5 名を対象に授業観察にて S-T 分析を行い、授業の型を分類した。その結果、対話型、講義型の授業が多いことが明らかとなった。

報告者は H 高等学校では実践的リーダーの立場を獲得することに時間を要し、学校全体に Chromebook を活用した「生徒同士が繋がる授業」を普及させることができず、学校全体で生徒の学びを深めていくことができなかつた。その結果、授業アンケートの平均値も上昇させることができなかつた。

第 5 章 まとめ

本実践では 2021 年度は K 高等学校、2022 年度は H 高等学校の異なる 2 校で実践を行うこととなった。働く環境や学校風土に違いが認められたが、K 高等学校においても H 高等学校においても教員の ICT 活用スキルの不足は共通の課題であった。また Chromebook を導入した授業のイメージも乏しかった。そこで、報告者は一斉授業から脱却し、Chromebook を導入した「生徒同士が繋がる授業」の実践と学校全体への発信と普及にむけて実践を重ねてきた。両校で共通の課題が浮かんだ。

2 校の実践を通しての課題は、「Chromebook 導入による『生徒同士が繋がる授業』を普及させられなかつた」という点である。授業について教職員全体で考える場を設定することができなかつたことが原因であると考えている。そのため、報告者は実践的リーダーとして研修等で Chromebook を活用した授業を展開することに向けて、教員同士が協働的に学び、繋がっていく場を設けていくことが重要であると考えている。